

## フィリピン民話に現れた猿に関する一考察

辻 貴志\*

## キーワード

猿、人間、動物民話、社会文化、フィリピン

## 目次

- I はじめに
- II 研究の方法
- III 事例と分析——フィリピン民話に現れた猿
  - (1) 悪玉型民話
  - (2) 猿の人間起源型民話
  - (3) 王子様型民話
  - (4) トリックスター型民話
  - (5) 悪魔型民話
- IV まとめと考察——猿とフィリピン人
- V おわりに

エジプトの王がある時猿に軍の舞を教えた。猿は人間の真似をするのが至ってうまいので、すぐに覚え、紫の衣装を着て面を被って踊るようになった。この見せ物は久しく好評を博していたが、やがて洒落っ気のある見物人が、懐に忍ばせた胡桃を真中に投げ入れた。猿どもはこれを見るなり踊りも忘れ、舞い人から本来の猿に戻って、面を破り衣装を引きちぎると、秋の実りの奪い合いを始めた。こうして舞の列も崩れ、満座の嘲笑を買ってしまった（イソップ 2010: 351–352）。

## I はじめに

本稿は、フィリピンにおける猿<sup>1</sup>の口承文芸に関する文献調査とその内容分析から構成される。フィリピンの人々の猿に対する観念を導き出すために、口承文芸の中でも動物民話を取り扱う。

世界の民話を俯瞰すると、猿は通常、文化的英雄及

びトリックスターとして現れ（Cormier 2017: 2）、その例として中国の孫悟空やインドのハヌマンが挙げられる（松村 2005: 193）。しかし、民話の中の猿の性質はこのような側面のみには留まらない。ここで、世界の民話に現れた猿の性質について先行研究を基に確認しておきたい。

日本の「桃太郎」では、猿が人間の家来になり鬼退治に加勢する（関（編）1997a: 12–15）。「猿の生き肝」では、猿の生き肝を求める亀を猿が騙し討ちし難を逃れる（下野（編）1974: 220–221）。「猿地蔵」では、猿地蔵を祀った老人に猿が賽銭を与える一方、猿地蔵の真似をした悪役の老人を川に落とす（関（編）1997a: 72–74）。「猿蟹合戦」では、悪知恵の働く猿が、蟹（あるいはヒキガエルや雉に転化）との食べ物を巡る争いの結果、絶命あるいは痛い目に遭わされる（楠山 1983: 184–193; 関（編）1997b: 145–155）。「猿婿入り」では、

\* 佐賀大学大学院

1 フィリピンには、4種の猿が棲息する。フィリピンカニクイザル (*Macaca fascicularis philippensis*)、フィリピンメガネザル (*Carlito syrichta*)、フィリピンヒヨケザル (*Cynocephalus volans*)、フィリピンスローロリス (*Nycticebus menagensis*) である (Alcala 1976: 140; Dickerson 1928: 274–275)。この中で、一般的にいわれる「猿」とみなされるのはフィリピンカニクイザルである。

猿と結婚させられた不遇な女性が猿を策略にかけ、谷底に突き落とす(稲田(編) 1999: 239-244)。中国では、荒くれ者で好色な猿である孫悟空が改心し、求法者として「西遊記」に現れる(中野 1985: 69)。インドでは、継母に邪険に扱われた息子が猿に姿を変える民話の他(Smith 1926: 375)、鰐を欺く「猿の生き肝」に類似する民話が見られる(Babbitt 2015: 3-9)。ブラジルの民話は、猿が鶏、狐、犬、虎に食べ物を借りた後で、狐が鶏、犬が狐、虎が犬を食べるよう仕向け、自身は虎から難を逃れる猿のトリックスターとしての側面を描いている(Elswit 2015: 79)。カリブ海地域では、猿が亀を見下したことを発端として、両者が殴り合い、猿は亀の胸を凹め、亀は猿の顔を平たくしたという動物の姿の由縁を取り扱った民話が確認できる(Sherzer comp., ed. and trans. 2003: 71-79)。同地域では、また、「猿の生き肝」と類似の民話も確認できる(Ray 2020: Scene 1)。アフリカのカメルーンの民話では、猿がカメレオンをたぶらかし人間に制裁を加えさせた結果、カメレオンから同様の仕打ちを受ける(江口(採録・訳) 2004: 158-161)。タンザニアの民話では、猿が水中でもがき苦しむ魚を救おうと陸に上げた結果、魚が干上がってしまう猿の無知が描写されている(Yebakima 2019: 109-110)。

以上の猿の民話を小括すると、猿は他者を軽んじて騙す無知かつ毛嫌いされる存在として描き出されている一方、人間に従順で、機知に富む側面も表されている。また、「猿の生き肝」のように超地域的な民話も確認され、この現象は人類の移動史と関係している可能性もあるが、人間が猿に対し普遍的に類似の観念を抱くことを示唆する。このように、人間の猿に対する観念は多様であり、一概に捉えることはできない。

本稿では、世界には猿に対する多様な観念を反映した民話が存在することを踏まえた上で、フィリピンの人々の間では猿に関する民話がどのような形式で解釈されているのか、そしてそこにはフィリピンの社会文化がどのように投影されているのかを解明することを目的とする。

## II 研究の方法

本稿では、フィリピンの猿に関する民話について、その構造と内容を分析する。本稿で記載する民話は、筆者が原典から要約したものである。民話の詳細については原典に譲る。収録した民話の中で、類型が同じ

ものは統合して示した。その場合は、民話内に括弧を設け、類似の点を補足した。民話の類型を示すアールネとトンプソンによるインデックス(Aarne-Thompson Type Index: AT分類)については、インデックスとの対応がなされている事例を表1の備考欄に示した。このインデックスは、世界の民話の類似性を知る上で重要な指標である。

## III 事例と分析——フィリピン民話に現れた猿

文献調査の結果、猿に関するフィリピン民話を20事例抽出した。それらを分析したところ、(1)悪玉型民話9事例(45%)、(2)猿の人間起源型民話6事例(30%)、(3)王子様型民話2事例(10%)、(4)トリックスター型民話2事例(10%)、(5)悪魔型民話1事例(5%)に便宜的に分類できた。

(1)悪玉型民話は、猿が民話の中で他者をたばかる悪者のイメージで登場しているのが特徴である。(2)猿の人間起源型民話は、主に人間の怠慢が超越者の怒りに触れ、人間が猿の姿に変えられる形式である。(3)王子様型民話は猿が王子となり、猿と結婚させられた女性を結果的に幸せにする筋書きである。(4)トリックスター型民話とは、トリックスター(他者を弄ぶ悪戯者の反面、自然や社会の秩序を反転させる存在)の性質を持つ猿の民話を指す。(5)悪魔型民話は、猿が魔性を持って現れる。

### (1) 悪玉型民話

#### 事例1(「猿と亀(イロカノ、カリンガ、ティンギアン)」)

猿と亀がバナナの木を見つけた(一緒にバナナの木を植えた)。猿は実のなったバナナの木の上半分、亀は下半分を得た。亀のバナナの木に実がなると(猿のバナナの木は枯れた)、猿は木に登り実を食べ始めた。木に登れない亀は猿にバナナの実を取ってくれるよう頼んだが、猿は未熟の青い実(バナナの皮/尻につけた実/猿の糞)を亀にぶつけた(そして、猿は眠った)。怒った亀は先端を尖らせた竹(鋭い貝殻/棘)をバナナの木の上に仕掛けた。(亀に唆され)猿は鋭い竹に突き刺さり絶命した。さらに、亀は猿の肉を切り刻み(焼き)、仲間の猿達に食べさせた(怒った猿達は亀に石を結わえて湖に沈めた。しかし、亀は大きな魚を持って浮上してきた。猿達も大きな魚を捕まえようと腰に石を結んで湖に飛び込んだが、溺れて浮上しなかった。唯一、妊娠中の猿が残ったが、亀はその猿も溺死させた/猿達は怪物を呼び、湖の水を飲み干させ、亀を捕えようとした。しかし、蟹が怪物の腹をハサミで切ると水が溢れ、猿達は溺死した)(Aquino 2007: 187-191; Bayliss

表1 フィリピン民話に現れた猿（文献調査を基に筆者作成）

類型	事例	民話名	民族	出典	備考
(1) 悪玉型民話	1	猿と亀	イロカノ カリंगा ティンギアン	Aquino (2007: 187-191); Bayliss (2013: 185-191); Cole (1915: 195-196, 223-224); Cole (1916: 176-178); Eugenio comp. and ed. (1989: 78); Fansler col. and ed. (2006: 471-476); Ramos (1998a: 48-49, 65-68); コロネル編 (1997: 301-304)	AT9B 柿争い型
	2	賢い猿と鱈	タガログ	Aquino (2007: 199-200); Eugenio comp. and ed. (1982: 270-271, 1989: 1-3); Fansler col. and ed. (2006: 471-476); Ramos (1998a: 57-60, 65-68)	AT91 猿の生き胆型
	3	猿と鱈	不明	Eugenio comp. and ed. (1989: 4-5); Fansler col. and ed. (2006: 471-476)	因幡の白兎型
	4	猿とトンボ	ビコラノ	Fansler col. and ed. (2006: 477-479); Ramos (1998: 66-68)	AT222
	5	バクワと猿	イロンゴ	Esteban et al. (2011: 140-142)	
	6	猿と亀と鱈	タガログ	Eugenio comp. and ed. (1989: 25-26); Fansler col. and ed. (2006: 480-481)	
	7	猿の民話	イロカノ	Cole (1916: 183-184)	
	8	2匹の猫と猿	不明	Wrigglesworth (1981: 43-44)	AT926D
	9	老夫婦と猿	不明	Ramos (1998a: 108-110)	
(2) 猿の人間起源型民話	10	最初の猿	タガログ	Eugenio comp. and ed. (1996: 355-356); Jocano (1969: 151-152)	
	11	最初の猿	タガログ イロカノ ティンギアン	Cole (1915: 190); Cole (1916: 201-203); Eugenio comp. and ed. (1996: 366-368); Fansler col. and ed. (2006: 527-529); Ramos (1998a: 14-17)	
	12	猿に姿を変えられた老人	マラナオ	Aquino (2007: 202-203); Cole (1915: 190); Eugenio comp. and ed. (1996: 366-368)	
	13	なぜ猿は賢いのか	タガログ	Eugenio comp. and ed. (1996: 396); Fansler col. and ed. (2006: 527-529)	
	14	どのようにして子供は猿になったのか	ブキドノン	Cole (1916: 130); Cole (1956: 129)	
(3) 王子様型民話	15	猿の創造	タガログ	Eugenio comp. and ed. (1996: 365-366); Fansler col. and ed. (2006: 527-529)	
	16	猿の皮を着たホアン	カパンパンガン ビコラノ	Fansler col. and ed. (2006: 228-233)	AT425B 動物婿型 脱皮型
(4) トリックスター型民話	17	猿の王様	ビコラノ	Ramos (1998b: 73-76)	動物婿型
	18	猿と犬と水牛	タガログ	Fansler col. and ed. (2006: 60-64)	
(5) 悪魔型民話	19	猿とホアン・プソン・タンビタンビ	ビサヤ	Fansler col. and ed. (2006: 413-419); Ramos (1998b: 81-86)	長靴を履いた猫型
	20	ベットの猿	タガログ	Eugenio comp. and ed. (2005a: 192-193)	

2013: 185–191; Cole 1915: 195–196, 223–224; Cole 1916: 176–178; Eugenio comp. and ed. 1989: 7–8; Fansler col. and ed. 2006: 471–476; Ramos 1998a: 48–49; コーネル(編) 1997: 301–304)。

本民話は、AT分類(AT9B)に包摂され、他世界にも同様の民話が確認できる。たとえば、日本の「猿蟹合戦」(「柿争い型」と内容が似る(楠山 1983: 184–193; 関(編) 1997b: 145–155)。この形式の民話は、アジア大陸の東部沿岸と島嶼地域に広く分布している(斧原 2004: 73)。東南アジア島嶼部では、フィリピンだけでなく、ボルネオ島やジャワ島にも分布している(Cole 1916: 178)。また、猿と亀の騙し合いは、「猿の心臓は葉」(「猿の生き肝」)の民話として世界的に確認できる(ウター 2011: 63)。亀の方が猿より知恵者であり、両者の熾烈な知恵比べの結果、猿が絶命するというパターンが多い(Ramos 1998a: 57–60)<sup>2</sup>。

#### 事例2(「賢い猿と鰐(タガログ)」)

知恵者の猿と鰐は友達だった。ある日、鰐の妻(母)が病気になった。その唯一の対処法は、猿の生き肝(肺/腎臓)を食べさせることであった。鰐は猿の生き肝を得るために、猿を川辺に呼び寄せた。そして、泳げない猿を背中に乗せて対岸に行こうと誘った。猿は鰐の申し出に応じて鰐の背中に乗った。川を渡る途中、鰐は真相を打ち明けた。驚いた猿は機転を利かせ、肝を川辺のマンゴー(ゲアバ/マコパ[マレーフトモモ])の木に掛けたのを忘れてきたので鰐に川辺に戻るよう言った。鰐は猿の話信じ、川辺に猿を送り返した。すると、猿はマンゴーの木に登り、肝が欲しければ木に登ってごらんと鰐を嘲笑った(Aquino 2007: 199–200; Eugenio comp. and ed. 1982: 270–271, 1989: 1–3; Fansler col. and ed. 2006: 471–476)。

類似の民話(Ramos 1998a: 57–60)では、次のように話が展開する。鰐が川に潜ったので、猿は鰐の目を引っ搔いた。そして、鰐が浮上したところで、猿は農夫に助けを求めた。以来、鰐は猿と人間の共通の敵になった。また、鰐は猿に復讐しようと試みるが、ごとく猿はあしらう(Eugenio comp. and ed. 1982: 270–271; Ramos 1998a: 57–60, 65–68)。これらの民話では、猿が機転の利く反面、鰐が愚鈍な様が表現されている(Tsuji 2021: 23)。本民話は、AT分類(AT91)の民話であり、日本、インド、カリブ地域の「猿の生き肝」

の民話と繋がりがあると考えられる(Babbitt 2015: 3–9; 長澤 2005: 169; Ray 2020: Scene 1; 下野(編) 1974: 220–221)。

#### 事例3(「猿と鰐(不明)」)

猿と鰐は敵同士だった。ある日、猿の王が湖の対岸にたくさんバナナがあることを知った。猿はバナナの実を食べたかったが、湖を渡らせてくれるよう鰐の王に頼むことを躊躇していた。ついに猿は決心し、鰐の王を訪問した。猿は鰐に何匹の召使いがいるか尋ね、自分の方が多く(多くの猿がいる場所に連れて行く)と言った。そして、鰐の召使いを数えることになり、猿は湖に列になって浮かぶよう鰐に懇願した。鰐の王は、召使い達を呼び出し整列させた。賢い猿は鰐の背中の上を歩き、鰐を数え始めた。対岸に着くと、猿は飛び跳ね、鰐に湖を渡らせてくれたことに礼を言った。そして、バナナの森に向かった(Eugenio comp. and ed. 1989: 4–5)。

本民話は、日本の「因幡の白兎」の民話と同根であろう。因幡の白兎型の民話では、鰐や鮫を軽視した罪で兎が皮を剥がれ(倉野(校註) 1963: 43)、ヴァヌアツの民話では鶏が羽毛をむしられるが(Runa et al. 2007: 1–10)、本民話では猿に対する鰐の復讐はない<sup>3</sup>。それどころか、類似の民話には猿が怒った鰐を騙して真っ赤な唐辛子の実を食べさせ苦しめる場面が含まれる(Fansler col. and ed. 2006: 471–476)。猿と鰐が登場するフィリピンの民話における両者の力関係は、猿に分がある。フィリピンでは、猿はマメジカに置き代わることもある(辻 2021: 54, Tsuji in press)。本民話は「トリックスター型」とも捉えられるが(山田 2017: 162)、本稿では猿の悪い側面に着目し「悪玉型」に分類した。トリックスター型の民話では、猿が必ずしも悪い存在として登場するとは限らない。世界的には、猿は、兎や鶏の他、ジャッカルや狐に姿を変え、即ちその地域に未知な動物は既知な動物に姿を変えて話の中に登場する(アールネ 1973: 47; ウター 2011: 45)。

#### 事例4(「猿とトンボ(ピコラノ)」)

疲れ切ったトンボが、猿の棲む木で休んでいると、猿が傲慢に追い払った。そのことを知ったトンボの王が猿の王に宣戦布告した。両者の戦いが始まると、棍棒を持った猿達が自分の額に止まったトンボをめがけて棍棒を振り下ろした。トンボは猿の攻撃をかわし、馬鹿な猿達は自分の頭を打ち自死した(Fansler col. and ed. 2006: 477–479)。

2 フィリピンやインドネシアでは、猿が貝やその他の動物に手を挟まれて溺死したり、懲らしめられたりする民話が多数見出される(後藤 2017: 223; 三吉 1942: 86)。

3 しかし、フィリピンやインドネシアでは、猿が鰐や鮫を騙して、背中を伝って岸に渡るが、嘘がばれて噛み付かれてしまう話が多い(後藤 2017: 223)。



本民話に類似したフィリピンの民話として、「猿と蝶」の戦いが確認できる。猿達は自分の額に止まった蝶を打ちのめそうと、自らの額めがけて棍棒を振り下ろし自死する。そして、猿は1匹のみ生き残り、蝶と共存する結末である (Ramos 1998b: 66-68)。なお、この形式の民話は、AT分類 (AT222) の民話であり、同様の民話は世界中に広く分布する。

#### 事例5 (「バクワと猿 (イロンゴ)」)

竹林にバクワ (黒い鳥) と猿が住んでいた。彼らは友達であった。ある日、猿はバクワに、鳥を捕まえないで日が昇ったら知らせよう頼んだ。日が昇るとバクワは鳴いた。驚いたことに猿はバクワを捕えた。バクワは「我々は友達ではないか」と叫んだが、猿は友達ではないと言った。猿はバクワの羽をむしった。そして、笑いながら、バクワを木の切り株に置き去りにした。やがて、バクワは傷から回復し飛べるようになると、舟を作ることに専念した。ある日、猿はバクワの舟を見て驚嘆し、行き先を尋ねた。バクワはボルネオ島に行くと言え、猿は自分も同行したいと申し出た。バクワは了承し、舟を浮かべるには錘が必要なので、腰に石を結び付けておくよう猿に言った。バクワと猿は舟を漕ぎ、沖に出た。すると舟が沈み始めたので、バクワは空中に飛んだ。猿は助けを乞うたが、バクワは友達ではないと言った。バクワが巣に戻ると、猿は海に沈んでしまった (Esteban et al. 2011: 140-142)。

本民話は、傲慢な猿に対するバクワの復讐劇であり、結果的に猿は命を落とす。また、猿の愚かな側面が表れている。

#### 事例6 (「猿と亀と鰐 (タガログ)」)

かつて誰をも欺く猿がいた。猿には多くの敵がいた。ある日、猿は旅の道中で疲れ切っている亀と鰐に出会った。猿はこれらの動物を騙してやろうと思った。猿は亀と鰐に近付き、宿泊場所と食べ物を提供すると言った。亀と鰐は猿に付いて行き、畑のカボチャを食べたところ、猿は姿を消した。農園の所有者である人間がその様子を発見するなり、亀と鰐を殺した (Eugenio comp. and ed. 1989: 25-26; Fansler col. and ed. 2006: 480-481)。

本民話は、他者を騙して欺く猿のイメージを具現している。そして、その狡猾さが他者の命を奪う質の悪い様子を示している。また、他者を簡単に信用してはならないという教訓を伝えていると考えられる。

#### 事例7 (「猿の民話 (イロカノ)」)

猿が木に登っていると、尻尾に棘が刺さった。床屋に相談すると、床屋は剃刀で猿の尻尾の先端を切断した。怒った猿は、床屋に剃刀をよこすよう要求した。その後、猿は老婆に出会い剃刀と薪を交換した。それから、猿は町で女性

に出会い薪とケーキを交換した。ケーキを携えた猿は犬と遭遇し、犬は猿を咬み殺した。そして、犬はケーキを平らげた (Cole 1916: 183-184)。

本民話では、猿が手に入れたはずのものが、結局は猿のものにならない様を描いている。さらに、猿を不愉快な存在として捉えている。

#### 事例8 (「2匹の猫と猿 (不明)」)

2匹の猫は旅の途中、餅を見つけた。彼らはそれを均等に分けようとした。しかし、二等分した餅の大きさを巡って口論となった。彼らは猿に仲裁を求めた。猿は餅を天秤にかけて。片一方の餅が重かったので、猿は重さを調整しようと言って餅をかじった。餅の重さが釣り合わないまま、結局猿は餅を全部食べてしまった。そして、問題を公平に解決させたと言った (Wrigglesworth 1981: 43-44)。

本民話は、猿のずる賢さを表している。猿の方が猫より上手であり、動物界の中でも猿の悪知恵が卓越していることが見て取れる。

#### 事例9 (「老夫婦と猿 (不明)」)

昔、森林の開拓地に老夫婦が暮らしていた。彼らは、猿に対して最初は寛容であった。しかし、次第に多くの猿が彼らの栽培したバナナを食い荒らすようになった。老夫婦は猿達と話したが、バナナが自分達のものという主張は受け入れられなかった。彼らは猿の駆除に乗り出したが、効果はなかった。そこで、彼らは策を練った。夫が死んだふりをし、その様子を見にきた猿達を家の中に閉じ込めた。そして、猿達を根絶した (Ramos 1998a: 108-110)。

本民話は、猿と人間の知恵比べを扱っている。人間が栽培するバナナを粗暴な猿が荒らした結果、人間が猿を殺す。猿を根絶する点で、猿が人間にとっていかに腹立たしい存在であるかを表している。そして、人間の知恵が猿を上回っていることを知らしめている。

## (2) 猿の人間起源型民話

#### 事例10 (「最初の猿 (タガログ)」)

年少の兄弟をいじめ、木に登って通行人に石を投げつける等、村で嫌われていた息子を父親 (母親) が咎めたところ、全く聞く耳を持たなかった。父親 (母親) が鞭 (杓子) で打つと息子は猿に姿を変えた (話す能力を失い、体は毛で覆われ、尻尾が付いた)。神が少年を罰して猿に姿を変えさせ、その猿は森に逃げ最初の猿となった (Eugenio comp. and ed. 1996: 366-368; Jocano 1969: 151-152)。

本民話は、悪戯や悪さを働くと、猿に姿が変わってしまうという子供に対する戒めの念が込められていると考えられる。猿と同一視されることは、この民話を

共有する人々にとって恥であることが窺える。また、鞭や杓子で子供を打つことが子供に対する躰の一環である文化的背景も読み取れる。

#### 事例11 (「最初の猿(タガログ、イロカノ、ティンギアン)」)

辛抱強い布織の女神(老婆/母親)と暮らしていた怠惰で飽きっぽい少女(少年)が、綿を洗い自身の服を作るようにとの女神の命令に反いた。少女は毛皮を身にまとった(ココナツの殻を投げつけた)。女神は少女の怠惰に怒り、少女の体に棒を押し付けた(鞭で打った/尻の穴に棒を突き刺した)。すると、少女は尻尾を持った猿に姿を変えた(綿が体中に広がり、茶色に変色し、猿の毛になった)。女神は、森の樹上で暮らし、自分で食べ物を採ろう猿に言付けた。このようにして、毛皮と尻尾を持った最初の猿が生まれた(人々は猿を町から追い出し、猿は森の樹上に棲むようになった)(Cole 1915: 190; Cole 1916: 202-203; Eugenio comp. and ed. 1996: 366-368; Fansler col. and ed. 2006: 527-529; Ramos 1998a: 14-17)。

本民話も、大人の堪忍袋の緒が切れる行いをした子供が猿に姿を変えられる。また、猿と人間の違いが、毛皮と尻尾の有無で区別されている。

#### 事例12 (「猿に姿を変えられた老人(マラナオ)」)

昔、利己的な果樹園主の老人がいた。彼は、果樹園の収穫を近所の人々に分配しなかった。ある日、子供達が果樹園の木に登り果物をもいでいると、彼は子供達に石を投げつけ怪我を負わせた。そのことを知った親達が、洞窟に住む賢者に相談した。賢者は乞食になりすましその老人に果物を乞うたが、拒否された。賢者が「お前は自分の利己心に後悔する事になるぞ」と言うなり、老人の姿は猿に変わった(Eugenio comp. and ed. 1996: 366-368)。

マラナオやティンギアンの間では、最初の猿は食べ物を盗んで姉(母)に杓子で打たれた少年(少女)だという民話もある。猿の尻尾は杓子からできているといい、子供達は(猿にならないよう)杓子で他人を打つことに気を付けている(Cole 1915: 190; Eugenio comp. and ed. 1996: 368)。子供達の喧嘩に腹を立てた母親が子供達を鞭で打ち、岸边に逃げた子供達はサマル(サマ)と呼ばれる民族になり、山に逃げた子供達は猿になったというミンダナオ島マギンダナオ州コタバト市の民話も類似している(コロネル(編)1997: 44)。

また、王と王妃が豪華なパーティーを開催し、そこに現れた乞食の老婆を邪険に扱い、皆で笑い者にしたせいで、老婆の化身である美女がパーティーの参加者全員を猿に変えてしまう類似の民話も確認できる

(Aquino 2007: 202-203)。

#### 事例13 (「なぜ猿は賢いのか(タガログ)」)

昔、貧しい男と7人の息子がいた。末っ子を除き、皆で協力し効率的に父親を支えた。後に、町で疫病が猛威を振るい、父親と末っ子以外は死んでしまった。父親は床に伏すようになったが、息子は何の世話もしなかった。彼は森に逃げ、父親は息を引き取った。神は彼を呪い、喋る能力を奪った。そして、猿として森に住まわせることを宣告した。猿は喋ることができないが、その賢さは人間から引き継がれたものである(Eugenio comp. and ed. 1996: 396; Fansler col. and ed. 2006: 527-529)。

本民話は、悪戯や怠惰に加え、親不孝もまた子供を猿の姿に変えることを示している。そして、猿が人間の化身であり、その悪さをする性質が人間に由来するとしている。

#### 事例14 (「どのようにして子供は猿になったのか(ブキドノン)」)

ある日、母親が子供達を連れて服を染色しようと染料の葉を鍋で煮た。染料を匙でかき混ぜたところ、火傷を負ってしまった。それを見て笑った子供達は猿に姿を変えた。猿の爪が黒いのは母親の染色を手伝っていたからである(Cole 1916: 130; Cole 1956: 129)。

本民話では、他人の不幸を笑った子供が猿に姿を変えられる。この種の猿の民話は、子供に対する道德教育的機能を有していると考えられる。そして、非道德な存在として猿が認識されている。

以上の形式の民話は、ルソン島山地部、フィリピン低地部、ミンダナオ島山地部にかけて広く分布している。母親の言付けを聞かなかった男の子が猿に姿を変えたり、怠惰や強欲な男性が猿に変貌したり、祖母を嘲笑った孫が猿に姿を変えるケースが多い。猿に姿を変えられることは、怠惰、利己心、不敬に対する戒めとして起きる(Eugenio comp. and ed. 1996: xl-xli, 355-356)。また、吝嗇を嫌い、年長者を敬うことを是とするフィリピンの社会文化とも結び付いているであろう。

#### 事例15 (「猿の創造(タガログ)」)

創造主(とそのしもべ)が地上に降り立つと、人間を創造した。創造主の力に嫉妬したしもべが同様に人間を創造しようとしたところ(創造主が人型にした粘土を掴み損ない、人型に尻尾状の突起が付くと)、猿が生まれた(Eugenio comp. and ed. 1996: 365-366; Fansler col. and ed. 2006: 527-529)。

本民話は「旧約聖書」に端を発すると考えられ、人間の失敗作として猿が創造されたことを示している。

そして、猿より人間の方が優れているとする観念が見て取れる。

### (3) 王子様型民話

#### 事例16 (「猿の皮を着たホアン (カパンパンガン、ピコラノ)」)

子供のない人間の夫婦が、猿の赤ん坊を授かった。ホアンと名付けられたその猿は成長すると、嫁を探しに家出した。ある時、彼は美しい王女の夢を見た。そのことを城の王様に伝え、王女をここに連れてくれば結婚を認めるが、失敗したら彼の首を斬ると言った。ホアンは王女を探しに出ると、困っている鳥に出会った。彼は鳥を助ける条件として、指輪を持ってくるよう言った。鳥から指輪を手に入ると、今度は魔法使い達を恫喝し、王女の住む島まで橋を架けさせた。ホアンは王女に出会い指輪を差し出し求婚した。彼は王女を連れて城に戻ったが、王様は猿と結婚した王女を城から追い出した。ホアンは王女に、自分は人間であると打ち明け、猿の皮を脱いだ。すると彼は人間の青年の姿になった。そして、ホアンは王子となり、王女と幸せに暮らした (Fansler col. and ed. 2006: 228-233)。

本民話は、動物婿型であり、猿と人間の婚姻を取り上げている。猿は王女を娶るために知恵を働かせ、難題を解決する。王様が猿と王女との婚姻に嫌悪感を抱く点で、人間の動物に対する毛嫌いが根底にあることを窺わせる。猿と人間の婚姻はこうした嫌悪感により成立しにくい。そこで、本民話は、猿を王子の化身とし、人間同士の婚姻に変換させることで円満に話を結ぶ。かつ、猿は人間の青年の化身という要素を帯び、猿の悪知恵や愚かさといった否定的な側面はかき消されている。猿は皮剥けば人間であることを示した本民話は、変身譚とも位置付けられる。あるいは、「脱皮型民話」(後藤 2017: 253-259) に包摂されるであろう。よって、猿は人間の化身でもあり、フィリピンでは猿即ち悪玉とは言い切れない。本民話は AT 分類(AT425B) に属することから、借用の可能性が高い。

#### 事例17 (「猿の王様 (ピコラノ)」)

かつて、森の側に王宮があった。森には魔女がおり、王様と不仲であった。魔女は、王様に企みを働いた。ハンサムな王子を、魔女の化身の乙女に一目惚れさせた。王子はその乙女と結婚したいと打ち明けたが、王様は強く反対した。その結果、王子は、別の女性と結婚することを決心した。そのことを聞いた魔女は癡狂になった。魔女は王家が廃れ、王子達は動物に姿を変えろと言いつつ。すると、王子は猿の姿になった。猿の王子は、魔法を解いてくれる乙女を待ち続けた。ある朝、失恋して森で自殺しようとした美しい乙女が現れた。猿の王子が乙女の前に姿を見せると、当初、彼女は驚き叫んだ。しかし、彼女は猿の目に高貴さを

見てとり、次第に同情的になった。ある日、乙女の猿に対する憧れは愛に変わった。乙女が眠りから覚めると、宮殿の中にいた。奇妙な猿がいなくなった代わりに、側には若くハンサムな王子が寝ていた。王子は目覚めると、乙女に口付けをした。すると、王様と家来達は、動物から人間の姿に戻った。魔女によってかけられた魔法はこうして解かれた。そして、王子は乙女と結婚した。王様が歳を取ると王子が王位に就き、王国を賢明に統治した (Ramos 1998b: 73-76)。

本民話では、魔女によって猿に姿を変えられた王子が、絶望の淵にあった乙女と出会う。当初、乙女は猿を毛嫌にするが、次第に猿の品位に対して好意を向けていく。その甲斐があり、王子は元の姿に戻る。そして、乙女に口付けをすると魔法が解け、全てが元通りになり、王子と乙女は結婚する。この民話も動物婿型に含まれるであろう。

### (4) トリックスター型民話

#### 事例18 (「猿と犬と水牛 (タガログ)」)

猿と犬と水牛は友達であった。彼らは都市の生活に疲れ、狩りをしに田舎に行った。初日、水牛が友達のために食べ物を用意した。そこに森の巨人が現れ、水牛を倒し、食べ物を平らげてしまった。次の日、犬が食べ物を用意した。再び巨人が現れ、犬を脅し、食べ物を平らげた。その翌日、猿が食べ物を用意した。巨人が現れると、猿は丁重にもてなし椅子に座らせた。猿が椅子をぐいっと引くと巨人はその下に掘ってあった穴に落ちた。猿は土で穴を埋めたが、犬と水牛が戻ってくるとその穴を掘り返してしまった。巨人はまだ穴の中で生きていた。巨人は穴から飛び出ると、犬と水牛を殺した。猿は木に逃れて難を逃れた。ある日、猿が森を歩くと、蔓の上方に蜂の巣を見つけた。そこに巨人が現れ、猿は王様の命令で毎時間鈴を鳴らさなければいけないと答えた。巨人がその蔓を引くと蜂が飛び回り、巨人を懲らしめた。巨人は怒り、猿を探し出したところ、猿がニシキヘビと遊んでいるのを確認した。猿は巨人にベルトを差し出すと言った。巨人はその美しい色のベルトを欲し、ベルトを巻くよう猿に命令した。猿がベルトと化したニシキヘビを巨人に巻き付けると、ニシキヘビは巨人を絞め殺した (Fansler col. and ed. 2006: 60-64)。なお、類似の民話はマラナオの間 (Dimalanta 1986: 4-17) やマレー世界 (Carrington 2016: 2-15) においても確認できる。

本民話は、水牛や犬とは違い、猿を知恵者として表現している。そして、猿が機転を利かせ、蜂やニシキヘビを利用し巨人を退治する様が描き出されている。

#### 事例19 (「猿とホアン・プソン・タンビタンビ (ビサヤ)」)

ホアン・プソン・タンビタンビ (マソイ) という男が、畑を荒らす猿を捕獲したが、いつか恩返しをしようと言ったので猿を逃した。猿は再びホアンを訪れ、王様 (村の首長)



の王女(娘)と結婚するよう進言した。猿は盗んだ金を持って王宮に出向き、自分の主人であるホアンがいかに金持ちであるかを吹聴した。猿が(金銀をちらつかせ)何度か王宮を訪れるうちに、王様はホアンに会いたくなかった。猿は川で水浴びしている裕福な商人の衣服を盗み、それが自分の主人のものだと王様に示した。猿はホアンに王女と結婚するよう告げ、彼は猿の指示に従うことにした。猿は機転を利かせ、化け物の住む(魔女を退治し)城を手に入れ、ホアンが金持ちだと周囲に答えさせ、王様を信じ込ませた。王女はホアンの容姿を気に入らなかつたが、結婚せざるを得なかつた(失意のあまり死んでしまった。あるいは、幸せに暮らした)。そして、ホアンは王になり、猿は宰相になった(Fansler col. and ed. 2006: 413-419; Ramos 1998b: 81-88)。

本民話は、「長靴を履いた猫」(スティーブンス 2018: 23-30)と同型であり、借用によって生じたものであると推察できる。猿は貧しい男性を裕福にするトリックスターとしての役割を演じている。王女がホアンを気に入らなかつたのは容姿のせいであると本民話では記されているが、花嫁が恐れたり嫌ったりするのはその動物であり(リュティ 2017: 31)、彼が猿と結び付いていたからだと考えられる。このように、たとえ成り上がったとしても、猿はフィリピンでは否定的なイメージで捉えられることが窺える。

## (5) 悪魔型民話

### 事例20(「ペットの猿(タガログ)」)

信心深い男性が、良く言うことを聞く猿を飼っていた。ある日、聖職者がその男性を訪問すると、猿は身を隠した。部屋の隅にいた猿に不信感を抱いた聖職者は、猿に向けて十字を切り聖水を浴びせた。すると銃声のような爆発音がし、猿は煙と共に消え去った。聖職者によると猿は悪霊であり、男性が地獄に落とされなかつたのは彼が毎晩寝る前に十字を切っていたからだ(Eugenio comp. and ed. 2005a: 192-193)。

本民話は、猿を悪魔の化身として描いている。人間の猿に対する不信感が表れており、猿と人間の共生が困難であることをほのめかしている。

## IV まとめと考察——猿とフィリピン人

以上、20事例から成るフィリピンの猿の民話を5

つの類型に分類し、内容を分析した。

フィリピンでポピュラーな猿の民話は、出典の多さの面からは「最初の猿」、「猿と亀」(AT9B)、「賢い猿と鱈」(AT9I)であることが窺える。「猿と亀」、「賢い猿と鱈」については、AT分類の民話であり、同類型の民話が世界で確認できる。「最初の猿」についてのAT分類は不明である。ただし、民話の原型を探ることが本稿の目的ではない。

類型面からは、「悪玉型民話」と「猿の人間起源型民話」が、本稿では20事例中15事例(75%)を占め、フィリピンでは猿が概ね否定的なイメージで捉えられてきたと見做して良いであろう。「悪玉型民話」では、猿が他者を騙し、唆す悪者であるとおおよそ統一できる。また、猿の愚鈍な様も描かれている。「猿の人間起源型民話」では、悪戯や怠惰な子供が、罰として猿に姿を変えられてしまう。この民話は、悪い行いをすると、同じく悪さを働く猿に身を落とすことへの因習的な警告でもある<sup>4</sup>。また、猿が人間から変身した存在であることを示している。

しかし、本稿は、必ずしも猿が否定的なイメージでのみ捉えられてきたのではないことも明らかにした。「王子様型民話」や「トリックスター型民話」がそのことを支持する。猿が王子に姿を変える、あるいは機転を利かせ貧しい若者を王女と結婚させるといった猿が人間を幸せにする側面も語られている。よって、フィリピンの猿の民話は、基本的に猿を否定的なイメージで捉え、一方で人間に利益をもたらす存在として捉える逆説性が生じていると解釈できる。しかし、これらの民話の中にも猿に対する毛嫌いが読み取れる。

フィリピンの猿の民話のほとんどは、猿を人間より下位に位置付けている。これにはキリスト教的な世界観が反映されていることが、「猿の創造」の民話からも支持できる。猿は所詮人間の出来損ないであり、人間には及ばないという論理である。

以上、フィリピンの猿の民話は、相対的に猿を否定的なイメージで描いてきた。それには人間の思考や行動の悪い側面が反映されており、子供の教育や社会秩序の維持のために猿の民話はしばしば語られてきたと考えられる。その過程で、猿はずる賢く、愚かであるという観念が民話を通して定着したのであろう。フィ

4 ここでは、猿のように毛が体中に生えたり、尻尾が付いたりすることが恐怖の対象となっている。特に、毛は、世界的に、人間と動物、市民と野蛮人、隣人と外国人、友と敵を区別するために、伝説や芸術作品、歴史の中で繰り返し用いられてきた(ステン 2017: 90)。



リピン人は、小学校で「猿と亀」や「最初の猿」の民話を習う。「猿と亀」は、フィリピン文化の根底にある幸福は仲間と分け合うべきという不文律（ホルンスタイナー 1977a: 45）あるいは道徳の形成に寄与している可能性がある。なぜなら、フィリピン人は「分かち合いができない」（*wala siyang pakikisama*）あるいは *hindi siya marunong makisama*）と言われることを最も恐れるからである（デ・ラ・コスタ 1977: 157）。「最初の猿」の民話は、社会生活の中で目上の人間に対し特別な忠誠を尽くさねばならないフィリピン人の価値観に根差したものである（リンチ 1977: 26; Yengoyan 2004: 22）。目上の人間を冒瀆することは、平均的なフィリピン人が好ましく思う家族や友人を大切にする社会性を重んじる人間関係（ホルンスタイナー 1977b: 56）を反故にしかねない。さらに、本稿で扱った20事例の民話の内、猿が他者に殺されるのは5事例（20%）であり、猿は殺意の対象としても見做されてきた。それは、民話の中の猿のような行いをすれば、死に関わる問題が生じかねないフィリピン社会の規範を暗示している。つまり、猿の民話は、フィリピン人の道徳、人間関係、社会規範を良く投影していると言える。

猿を否定的に捉えるフィリピン人の観念は、フィリピンの植民地経験と関連するのではなかろうか。フィリピンは15世紀までにアラブ、ヒンズー、中国から多大な影響を受けてきた（ホルンスタイナー 1977c: 4）<sup>5</sup>。その後、フィリピンは16世紀初頭から19世紀後半にかけ（1565～1898年）、スペインの植民地と化した。その過程で、キリスト教が布教された。今日、キリスト教的な思考は、国内で絶対多数（約95%）の人々の間に根差している。キリスト教的思考あるいは西洋では猿に畏敬の念が生じることはないと言われ（モリス 2015: 8-9）<sup>6</sup>、フィリピン人はそのような西洋的な価値観に侵食されてきた歴史を有する<sup>7</sup>。さらに、フィリピンはスペイン植民地経験の次に、アメリカによる植民地支配を経験した（1898～1946年）。今日、フィリピンでは、タガログ語と共に英語が公用語であり、

monkey という英単語は、「弄ぶ、悪戯をする、馬鹿げた遊びをする」という動詞としても定義される（モリス 2015: 6）<sup>8</sup>。このように、アメリカによる植民地経験を通して、フィリピン人は一層猿に対して否定的なイメージを付与していったと考えられる。加えて、フィリピンは、日本による植民地支配を経験した（1939～1945年）。日本人は、猿との間に距離を置くために、人間の悪い側面を猿に投影し、悪戯に人間を模倣するおかしな動物として、スケープ・ゴート化した（大貫 1995: 14）。日本人の猿に対する多面的な感情（廣瀬 1990: 34）もフィリピン人に影響を与えたのではないかと推測できる。以上のように、フィリピンで猿がネガティブに捉えられてきた背景として、長年の植民地経験が影響している可能性が考えられる。その他、フィリピンにおける民話のルーツは、人類史における人の移動、宣教師らによるキリスト教的価値観の導入、フィリピン文化の一端を成す海外出稼ぎによる外国民話の移入といった要因が複雑に入り混じっているであろうが、本稿の限界を超える壮大な問題であることを指摘するに留める。

本稿は、フィリピンの民話に現れた猿が、おおよそ否定的に解釈されてきたことを浮かび上がらせたが、その反面、人間に利益をもたらす事例もあり、両義的な存在であることを明らかにした。両義的な存在とは、民話の中の猿が善悪の両面を帯びている、あるいは人間と動物の間にいると言い換えることができるであろう。しかし、猿はフィリピン社会における人の行動や考え方の悪い側面を具象化した存在であり、社会的に逸脱した存在として捉えられる。規範からの逸脱は現実において制裁の対象となり、人々は民話の中の猿に制裁を加えることで、道徳を蔑ろにしないよう自制してきたのではなかろうか。フィリピン人にとって、民話に現れた猿とは、社会において自身の言動を制御すると共に、規範を重要視するための自己を振り返る鏡の役割を担っていると考えられる。それは、民話に現れた猿のような狡猾さと身勝手さに背反する、フィリピン人が最も価値を置くレシプロカル（互惠的）な人

5 このように、フィリピンを始め東南アジア島嶼部は、ヒンズー、イスラーム、キリスト教等、外来文化の影響が長く及んだ地域であり、文化や神話には大きな変容が見られる点に注意が必要である（後藤 2002: 10; Lopez 2006: xxii）。

6 キリスト教や西洋の思考において猿に畏敬の念が生じないとする主張は西洋中心主義的であり、検証が必要である。

7 キリスト教に限らず、アラブの影響を受けたイスラームにおいても猿は忌避される。しかし、ヒンズーが浸透したインドネシアのバリ島では、猿は神聖視される（Peterson and Reley 2017: 206）。

8 フィリピンのパラワン島の先住民の間では、一般的に価値の低いものを示す際、単語に「猿（*ujaw*）」という接尾辞を付すことを筆者は確認している（辻 2013: 115）。

間関係に根差した文化の美德を追求する規矩であると結論付けられる。

## V おわりに

本稿は、フィリピンの口承文芸の中でも動物民話に着目したが、諺や謎々にも猿は登場する。それらを本稿で逐一紹介することは叶わなかったが、「猿はたとえ賢くとも、所詮愚かである」という否定的な諺ばかりがフィリピン各地で伝承されている (Eugenio comp. and ed. 2002: 373-374)。謎々においても、猿は「罪がないのに捕われられ、一生投獄されるもの」といった罪深く粗野な存在として現れている (Eugenio comp. and ed. 2005b: 333-334)。このように、諺や謎々もまた、民話に現れた猿の否定的なイメージを補強する。

民話の中には、その民族が気付かずに持っているような基層的な考え方、自然への接し方、動物への対し方が染み込んでいるはずである (小澤 1994: 24)。猿の民話を検証することは、猿とフィリピン人の関係に加え、人間の理解にも寄与するであろう。引き続き、フィリピンの民話を始めとする動物民族誌に関する研究を展開していきたい。

### 謝辞

本稿を本誌に投稿するにあたり、編集委員の方々には、終始、多大なご尽力を賜った。匿名の査読者の方は、草稿に丁寧に目を通して下さり、たいへん熱心な指導をして頂いた。校正者の方は、草稿の構成の不備を綿密に指摘して下さい。ここに、厚く謝意を表す次第である。

本稿の着想を得た契機は、2009~2010年にかけて行われた万葉古代学研究所委託共同研究「万葉の深層を探るエスノアルケオロジー的研究——とくに海洋伝承を中心に」に共同研究者として参加させて頂いたことによる。同共同研究会のシンポジウムにおいて、筆者は、「『守護神』としてのサメとワニ——フィリピン・パラワン島の事例」という発表の機会を得た。その過程で、フィリピンの民話における鱈と猿との関係に関心を持ち、特に人間が畏怖する鱈を弄ぶ猿に込められたフィリピン人の観念について調べてみたいと考えた次第である。本点、共同研究会の代表者であった南山大学人類学研究所の後藤明教授の御学恩によるところが極めて大きい。後藤教授はまもなく定年退職を迎えられる。ささやかではあるが、本稿を以て後藤教授を労うと共に、これからのさらなる御活躍をひたすら願うばかりである。

## 参考文献

(日本語文献)

アールネ、アンティ

- 1973 『昔話の比較研究』関敬吾 (訳)、岩崎美術社 (Aarne, von Antti 1959 *Leitfaden der vergleichenden Märchenforschung; Übersicht der Märchenliteratur; Der tiersprachenkundige Mann und seine neugierige Frau: eine vergleichende Märchenstudie*. Helsinki: Suomalaisen Tiedeakatemia)。

デ・ラ・コスタ、ホラシオ

- 1977 「フィリピンの国民的伝統」『フィリピンのこころ』メアリー・ラセリス・ホルンスタイナー (編)、山本まつよ (訳)、pp. 153-175、文遊社 (de la Costa, Horacio, S. J. 1971 *The Filipino National Tradition*. In. *Challenges for the Filipinos: Lenten Lectures*. Bonoan, Raul, S. J. (ed.), pp. 42-66. Quezon City: Ateneo Publications Office, Ateneo de Manila University)。

江口 一久 (採録・訳)

- 2004 「カメレオンとサル」『語りつぐ人々——アフリカの民話』江口一久、中島久、中野暁雄、西江雅之、増井久代、松下周二、スーザン・ムゾニ・ムワニキ、守野庸雄、和田正平 (著・訳)、pp. 158-161、福音館書店。

稲田 浩二 (編)

- 1999 『日本の昔話(上)』筑摩書房。

イソップ

- 2010 『イソップ寓話集』中務哲郎 (訳)、岩波書店 (Perry, Ben Edwin 1952 *Aesopica. A Series of Texts Relating to Aesop or Ascribed to Him or Closely Connected with the Literary Tradition that Bears His Name. Vol. I: Greek and Latin Texts*. Urbana: The University of Illinois Press.)。

コロネル、マリア (編)

- 1997 『フィリピンの民話』竹内一郎 (訳)、青土社 (Coronel, Sister Maria Delia 1967 *Stories and Legends from Filipino Folklore*. Manila: University of Santo Tomas Press.)。

後藤 明

- 2002 『南島の神話』中央公論新社。

- 2017 『世界神話学入門』講談社。

廣瀬 鎮

- 1990 『もの与人間の文化史34——猿』法政大学出版局。

ホルンスタイナー、メアリー・ラセリス

- 1977a 「フィリピン社会の社会学的展望」『フィリピンのこころ』メアリー・ラセリス・ホルンスタイナー (編)、山本まつよ (訳)、pp. 33-54、文遊社。

- 1977b 「タガログの社会組織」『フィリピンのこころ』メアリー・ラセリス・ホルンスタイナー (編)、山本まつよ (訳)、pp. 55-78、文遊社 (Hollnsteiner,

- Mary Racelis 1967 *Tagalog Social Organization. In. Brown Heritage: Essays on Philippine Cultural Tradition and Literature.* Mamuud, Antonio G. (ed.). pp. 134-148. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.)。
- 1977c 「はじめに」『フィリピンのこころ』メアリー・ラセリス・ホルンスタイナー(編)、山本まつよ(訳)、pp. 3-11、文遊社。
- 倉野 憲司(校注)  
1963 『古事記』岩波書店。
- 楠山 正雄  
1983 『日本の神話と十大昔話』講談社。
- リュティ、マックス  
2017 『ヨーロッパの昔話——その形と本質』小澤俊夫(訳)、岩波書店(Lüthi, Max 1976 *Das europäische Volksmärchen: Form und Wesen.* Bern: A. Francke.)。
- リンチ、フランク  
1977 「フィリピン——東南アジアへの架け橋」『フィリピンのこころ』メアリー・ラセリス・ホルンスタイナー(編)、山本まつよ(訳)、pp. 17-31、文遊社(Lynch, Frank, S. J. 1967 *Philippines: Bridge to Southeast Asia. Philippine Studies* 15 (1): 167-176.)。
- 松村 一男  
2005 「トリックスター・文化英雄」『世界神話辞典』(第4版)大林太良、伊藤清司、吉田敦彦、松村一男(編)、pp. 193-213、角川書店。
- 三吉 朋十  
1942 『南洋動物誌』モダン日本社。
- モリス、デズモンド  
2015 『サル——その歴史・文化・生態』伊達淳(訳)、白水社(Morris, Desmond 2013 *Monkey (Animal Series).* London: Reaktion Books Ltd.)。
- 中野 美代子  
1985 『孫悟空の誕生——猿の民話学と「西遊記」』(第2刷)玉川大学出版部。
- 長澤 武  
2005 『ものと人間の文化史124-II——動物民俗II』法政大学出版局。
- 斧原 孝守  
2004 「猿と亀のバナナ争い」『世界昔話ハンドブック』稲田浩二(編)、pp. 72-74、三省堂。
- 大貫 恵美子  
1995 『日本文化と猿』平凡社。
- 小澤 俊夫  
1994 『昔話のコスモロジー——ひとと動物との婚姻譚』講談社。
- 下野 敏見(編)  
1974 『日本の民話25——屋久島篇第1集・第2集』未来社。
- 関 敬吾(編)  
1997a 『桃太郎・舌きり雀・花さか爺』岩波書店。
- 1997b 『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎』岩波書店。
- ステン、カート  
2017 『毛の人類史——なぜ人には毛が必要なのか』藤井美佐子(訳)、太田出版(Stenn, Kurt 2016 *Hair: A Human History.* New York: Pegasus Books.)。
- スティーブンス、ジョン  
2018 『人間を幸せにする猫の童話集』池田雅之(訳)、草思社(Stephens, John Richard 1993 *The King of the Cats and Other Feline Fairy Tales.* Boston: Faber & Faber.)。
- 辻 貴志  
2013 「フィリピン・パラワン島先住民モルボッグの貝の採捕と民俗知識」『年報人類学研究』3: 97-121。
- 2021 「フィリピン民話のなかのマメジカ(ピラドック)」『動物観研究』26: 51-55。
- ウター、ハンス=イェルク  
2011 『国際昔話話型カタログ——アンティ・アールネとステイス・トムソンのシステムに基づく分類と文献目録』加藤耕義(訳)・小澤俊夫(日本語版監修)、小澤昔ばなし研究所(Uther, Hans-Jörg 2004 *The Types of International Folktales: A Classification and Bibliography Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson Part 1-3 (Folklore Fellows Communications 284-286).* Helsinki: Academia Scientiarum Fennica.)。
- 山田 仁史  
2017 『新・神話学入門』朝倉書店。
- (外国語文献)
- Alcala, Angel  
1976 *Philippine Land Vertebrates: Field Biology (A College Textbook).* Quezon City: New Day Publishers.
- Aquino, Gaudencio  
2007 *Philippine Myths and Legends.* Quezon City: Printon Press.
- Babbitt, Ellen  
2015 *The Monkey and the Crocodile: And Other Fables from the Jataka Tales of India.* New York: Dover Publications, Inc.
- Bayliss, Clara  
2013 *Philippine Folk-Tales.* Hamburg: Tredition.
- Carrington, Jim  
2016 *Sang Kancil and the Tiger.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Cole, Fay-Cooper  
1915 *Traditions of the Tinguian: A Study in Philippine Folk-Lore (Anthropological Series 14 (1)).* Chicago: Field Museum of Natural History.
- 1956 *The Bukidnon of Mindanao.* Chicago: Chicago Natural History Museum Press.



- Cole, Mabel  
1916 *Philippine Folk Tales*. Chicago: A. C. McClurg & Co.
- Dickerson, Roy  
1928 *Distribution of Life in the Philippines*. Manila: Bureau of Printing.
- Dimalanta, Wytan  
1986 *Mga Pakikipagsapalaran ni Pilandok (Halaw sa Kuwentong-Bayan ng Maranaw)*. Metro Manila: National Book Store.
- Elswit, Sharon  
2015 *The Latin American Story Finder: A Guide to 470 Tales from Mexico, Central America and South America, Listing Subjects and Sources*. North Carolina: McFarland.
- Eugenio, Damiana (comp. and ed.)  
1982 *Philippine Folk Literature: An Anthology*. Quezon City: Folklore Studies Program, College of Arts & Sciences, University of the Philippines and The U. P. Folklorists, Inc.  
1989 *Philippine Folk Literature: The Folktales*. Quezon City: U. P. Folklorists, Inc.  
1996 *Philippine Folk Literature: The Myths* (Philippine Folk Literature Series 2). Quezon City: The University of the Philippines Press.  
2002 *Philippine Folk Literature: The Proverbs* (Philippine Folk Literature Series 6). Quezon City: The University of the Philippines Press.  
2005a *Philippine Folk Literature: The Legends* (Philippine Folk Literature Series 3). Quezon City: The University of the Philippines Press.  
2005b *Philippine Folk Literature: The Riddles* (Philippine Folk Literature Series 5). Quezon City: The University of the Philippines Press.
- Fansler, Dean (col. and ed.)  
2006 *Filipino Popular Tales*. South Carolina: BiblioBazaar.
- Jocano, Felipe Landa  
1969 *Outline of Philippine Mythology*. Manila: Centro Escolar University Research and Development Center.
- Lopez, Mellie  
2006 *A Handbook of Philippine Folklore*. Quezon City: The University of the Philippines Press.
- Peterson, Jeffrey and Riley, Erin  
2017 Sacred Monkeys? An Ethnographic Perspective on Macaque Sacredness in Balinese Hinduism. In Dore, Kerry, Riley, Erin and Fuentes, Agustín (eds.). *Ethnoprimateology: A Practical Guide to Research at the Human-Nonhuman Primate Interface* (Cambridge Studies in Biological and Evolutionary Anthropology). Cambridge: Cambridge University Press, pp. 206–218.
- Ramos, Maximo  
1998a *Tales of Long Ago in the Philippines*. Quezon City: Phoenix Publishing House, Inc.  
1998b *Philippine Myths, Legends, and Folktales*. Quezon City: Phoenix Publishing House, Inc.
- Ray, Afiya  
2020 *Monkey Liver Soup and Other Stories: Caribbean Folktales: A Retelling* [Kindle version]. Retrieved from Amazon.com on April 22, 2022.
- Runa, Véronique, Gardissat, Paul and Grindley, Pauline  
2007 *La Poule Rousse et les Crocodiles de Mer* (Pauline Grindley, trans.). Port Vila: Centre Culturel du Vanuatu.
- Sherzer, Joel (comp., ed. and trans.)  
2003 *Stories, Myths, Chants, and Songs of the Kuna Indians*. Texas: The University of Texas Press.
- Smith, William  
1926 Ao Naga Folktales. *Folklore* 37 (4): 371–394.
- Tsuji, Takashi  
2021 Crocodiles in Philippine Folklore. *The Southeastern Philippines Journal of Research and Development* 26 (1): 19–34.
- Tsuji, Takashi  
in press The Mouse Deer as a Trickster in Philippine Folktales. *The Southeastern Philippines Journal of Research and Development* 27(2).
- Wrigglesworth, Hazel  
1981 *An Anthology of Ilianen Manobo Folktales* (San Carlos Publications. Series A, Humanities 11). Cebu City, Philippines: University of San Carlos.
- Yebakima, Xavier  
2019 *African Fables and Folktales: Stories, Parables and Folk Tales from All Around Africa*. Canada: New Worlds Publishing Editions.
- Yengoyan, Aram  
2004 Values and Institutions in the Philippines: The Social Anthropology of Frank Lynch. In *Philippine Society and the Individual: Selected Essays of Frank Lynch*. Yengoyan, Aram and Makil, Perla (eds.), pp. 13–25. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.